

Title	P.ゲデスと都市社会学の展開
Sub Title	P. Geddes and the deployment of urban sociology
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	Patrick Geddes is known as a sociologist, a geographer, and a city planning scholar. Geddes's name appears as a scholar of the beginning in the field of city planning study or city geography. Research of the sociology about a city appeared as "Civic Sociology" by P. Geddes in Britain at first. The method of research developed by L. Mumford. Moreover, it was succeeded by C. Zueblin also in Chicago. Although Geddes advocated the urban study by sociology, it is not an overstatement to hear his name in the world of sociology at all, although there is nothing. Why did it become such a thing? Research of the sociology about a city is done to have been started in Chicago of the 1920s. Then, R. E. Park played the big role. Publication of the "City" in 1925 by R.E. Park, E.W. Burgess, and R. D. McKenzie was what tells birth of sociological urban study. They are separating the side of social welfare or city planning from an urban problem, and asked for new urban study. "Urban Sociology" as urban study based on the scientific sociology which uses human ecology as a theoretical support here was produced. A rapid change of the latest society needs reconsideration of the state of research like social science of city life. Research of urban sociology has indispensable relation with city planning or social welfare. In the meaning, research of urban sociology needs the check of the starting point. Of course, it is not retrospection of the mere starting point. City planning and social welfare have come to form a form original during the first [about] century as a nation-state of each country. However, it will never be useless to go back to the starting point and to examine urban sociology here. It is not an overstatement although there has been no name of Geddes in research of the sociology about a city since Fukutaro Okui. And there was no sociologist who takes the view different from him. Geddes was not told between the researchers of sociology. Even if Geddes's urban study is rediscovery in the field of city planning study or geography, in sociology, it is discovery and is not rediscovery.
Notes	特集都市・ 公共・ 身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・ プロジェクト 第I部 社会学研究の変貌とゲデスの発見
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第I部 社会学研究の変貌と ゲデスの発見

P. ゲデスと都市社会学の展開

——藤 田 弘 夫*——

P. Geddes and the Deployment of Urban Sociology

Hiroo Fujita

Patrick Geddes is known as a sociologist, a geographer, and a city planning scholar. Geddes's name appears as a scholar of the beginning in the field of city planning study or city geography. Research of the sociology about a city appeared as "Civic Sociology" by P. Geddes in Britain at first. The method of research developed by L. Mumford. Moreover, it was succeeded by C. Zueblin also in Chicago. Although Geddes advocated the urban study by sociology, it is not an overstatement to hear his name in the world of sociology at all, although there is nothing. Why did it become such a thing?

Research of the sociology about a city is done to have been started in Chicago of the 1920s. Then, R. E. Park played the big role. Publication of the "City" in 1925 by R. E. Park, E. W. Burgess, and R. D. McKenzie was what tells birth of sociological urban study. They are separating the side of social welfare or city planning from an urban problem, and asked for new urban

* 慶應義塾大学文学部社会学教授

study. "Urban Sociology" as urban study based on the scientific sociology which uses human ecology as a theoretical support here was produced.

A rapid change of the latest society needs reconsideration of the state of research like social science of city life. Research of urban sociology has indispensable relation with city planning or social welfare. In the meaning, research of urban sociology needs the check of the starting point. Of course, it is not retrospection of the mere starting point. City planning and social welfare have come to form a form original during the first [about] century as a nation-state of each country. However, it will never be useless to go back to the starting point and to examine urban sociology here.

It is not an overstatement although there has been no name of Geddes in research of the sociology about a city since Fukutaro Okui. And there was no sociologist who takes the view different from him. Geddes was not told between the researchers of sociology. Even if Geddes's urban study is rediscovery in the field of city planning study or geography, in sociology, it is discovery and is not rediscovery.

1. P. ゲデス：埋もれた都市社会学者

パトリック・ゲデス (Patrick Geddes, 1854～1932) は社会学者、地理学者、都市計画学者として知られている。ゲデスの名は、都市計画学や都市地理の分野で草創期の学者として登場する。とくに、かれが 1915 年に著した『進化する都市』は、古典として高い評価を受けている。戦前には、ゲデスは地理学の分野や都市計画の分野において盛んに議論されていた。多くの研究者がさまざまな視角から、ゲデスの研究に言及している。それは、戦後にまで及んだ。1982 年には、ついにゲデスの代表作のひとつ『進化する都市』が鹿島出版会から翻訳刊行されるにいたった。

ところが、ゲデスは都市社会学を提唱したにもかかわらず、社会学の分野でかれの名を知る人は少ない。社会学の都市研究者がパトリック・ゲデ

スの名前を聞くことは、まったくないといっても過言ではないだろう。かといって、ゲデスの名が社会学で完全に無名かという、そうでもないようである。たとえば『新社会学事典』（有斐閣）には、ゲデスの名がコナーベーション (conurbation) の概念とともに、連接都市、連担都市、連合都市などの訳語とともに記載されている。現在、都市研究者の間で使用されているコナーベーションの概念はかれの造語なのである。

とはいっても、ゲデスが都市社会学の研究者のあいだで取り上げられることはなかった。では、どうしてこのようなことになったのであろうか。都市社会学が1920年代のシカゴで成立したことについては、定説となっている。その画期となったのが、R.E. パーク (Robert E. Park), E. W. バージェス (Ernest W. Burgess), R. マッケンジー (Roderick D. McKenzie) による1925年の『都市』の出版である。このことは、日本で都市社会学の研究を創始した奥井復太郎以来の定説となっている。

奥井復太郎はクロボトキン、ジョン・ラスキンの思想や田園都市に関心をもった後、都市研究と社会政策の研究のためにドイツに留学している。帰国後、かれはシカゴの社会学者の都市研究を導入するようになる。奥井はN. アンダーソンのように都市社会学の起源が19世紀のスラム研究にあるとの見解を忘れていない。しかしかれはパーク、バージェス、ルイ・ワース (Louis Wirth) などの活躍をもって、シカゴにおいて都市社会学が誕生したと位置づけている (奥井; 1932 (1970) 42-43)。そこに、ゲデスの名はなかった。さらに奥井はシカゴの研究者たちとは異なり、T. アダムス (Thomas Adams), T. シャープ (Thomas Sharp), P. アーバークロンビー (Patrick Abercrombie) などによるイギリスの都市計画を検討している。しかしそこにもゲデスの名はなかった。

奥井とは別のルートで、都市の社会学的研究に入っていたのが磯村英一である。かれは関東大震災のセツルメント運動にかかわるなど、異色の経歴をもつ行政マンとして都市の研究を進めていた。かれはシカゴ学派の

研究に目を配りながら、都市の病理へ鋭い目を向けていた。しかし磯村はセツルメント運動にかかわりながらも、この運動と深い関係をもって都市研究を進めたゲデスに着目することはなかった。

戦後、アメリカ社会学がドイツ社会学にかわって、怒涛のように流れ込んできく。その際、R. E. パーク、E. W. バージェスらのシカゴ学派の都市研究の意義が強調された。戦後、都市社会学は大きく発展していった(新明, 1959)。このことは、また、アメリカ社会学の都市社会学観を受けたものであった。しかもそのことは、ゲデスの活躍したイギリスの社会学の見解ともなっていた。イギリスの社会学は長い伝統をもっているが、1960年代まで他の諸国と比べて低迷を続けていた。こうしたなかで、イギリスの社会学でもアメリカの見解を踏襲して、都市の社会学をシカゴ学派にもとめてきた。しかし最近、イギリスにおいてもゲデスの都市社会学を見直そうとする動きが出ている。ゲデスはユートピアンだとされ、社会科学のなかに位置づけられてこなかった。しかし M. セイヴェージや A. ワードたちは P. ゲデスや M. V. ブランフォード (M. Victor Branford) の研究をシカゴ学派とは別につけ加えなければならないと指摘している (Savage, et al., 2003: 21)。

最近、M. A. ロマーノは忘れた社会学者を掘り起こす『忘れられた社会学者再考』を著した。そこではジェーン・アダムス (Jane Adams)、ワルター・ベンヤミン (Walter Benjamin)、ジョージ・ヴィンセント (George E. Vincent)、ベアトリス・ウェブ (Beatrice Webb)、ドゥ・ボアス (W. E. B. Du Bois)、ソロキン (P. A. Sorokin)、ハリエット・マーチノー (Harriett Martineau)、フローラ・トリスタン (Flora Tristan) などが取り上げられ、社会学者の範囲をかなり広い視点まで拡大している (Romano, 2002)。しかしそこにも、ゲデスの名はない。パトリック・ゲデスは都市計画学者、都市地理学者として知られているだけである。

では、どのような事情で、ゲデスは都市社会学を提唱しながらも、社会

学の分野では埋もれてしまったのであろうか。日本の都市社会学の展開のなかでも、これまでゲデスに取り上げられることはなかった。

2. P. ゲデスとロンドン社会学会

パトリック・ゲデスはスコットランドに生まれた。ゲデスは進化論者トーマス・ハスクレー (Thomas H. Huxley) のもとで生物学を学んだ後、コント (A. Comte) の社会学やル・プレー (P. G. F. Le Play) の社会調査を学んだ。かれの知識と経験は恐ろしいほど広範に及ぶが、30代後半以降は専ら都市研究を中心に活動している。かれはデュルケム (E. Durkheim) など大陸の社会学の影響を受けるとともに、社会調査の意義を強調したのである。

イギリスにおける資本主義の発展は莫大な富を生み出していた。しかしその一方で、都市には慢性的な失業や疫病が蔓延していた。それは資本主義のアキレス腱となっていた。このため労働者生活の病態と救済策を求めてさまざまな社会調査が実施されるようになる。1850年代にH. メヒュー (Henry Mayhew) は、ロンドンでインタビュー調査を行っている。C. ブース (Charles Booth) は、ロンドンの労働者の生活の大規模な調査を行い、その成果を1887年から断続的に発表していた。

ゲデスは1880年代にエディンバラに移り住み旧市街の再開発に取り組む。かれは1890年、エディンバラ城の正面のロイヤルマイルを上りきったところに展望塔 (Outlook Tower) の建物を手に入れる。そこにかれは、地域博物館 (Regional Museum) と社会学的実験室 (Sociological Laboratory) を設置する。展望塔は学問の新しい中心として学校、会議場、出版社、クラブの場となっていた。夏季の学術会議には、ヨーロッパの各地からドイツの進化主義者 E. ヘッケル (Ernst Haeckel) やフランスの地理学者 E. ルクリュ (Elisée Reclus) など高名な学者が次々とやってきた。アメリカからもハーヴァード大学のウィリアム・ジェームズ (William

James), シカゴのチャールズ・ズウェブリン (Charles Zueblin), ミシガン大学の哲学者ウェンリー (R. M. Wenley) などが大西洋を船で越えてやってきた (Mairet, 1947: 64).

ゲデスは急激に成長するエディンバラが世界中でもっとも勉強になる実験室であるとして、繰り返し都市調査に取り組んだ。かれは展望塔で数多くの都市計画を手がけ、そこはまさに「世界最初の社会学的実験室」(The World's First Sociological Laboratory) と呼ぶにふさわしいところであった (Zueblin, 1899). ゲデスは展望塔をエディンバラ大学の社会学研究所にしようとする。しかしそれは果たせなかった。ゲデスは1900年以降、活躍の舞台をロンドンに移している。イギリスでは、社会学 (Sociology) の名称が社会主義 (Socialism), 社会科学 (Social Science), 社会の科学 (The Science of Society) と互換的に使われていた。これらのことばの境界は流動的であった。さまざまなかたちで社会学の研究が進められてきた。

1903年に、M. V. ブランフォード (M. Victor Branford) は「社会学の言葉の起源と用法」に関心をもつ研究者を組織しようとする。そして J. ブライス卿 (The Rt. Hon. J. Bryce) を会長に社会学会 (Sociological Society) を設立する。社会学会は都市学 (Civics), 人種研究 (優生学), 社会事業の異なった運動が連合して作られた⁽¹⁾。ゲデスは社会学会で中心的役割を果たしていた。1904年5月のロンドンで開催された会議では、F. ゴルトン (Francis Galton) による「優生学—その定義、範囲、目的」の発表があった。1904年7月の会議は、ゲデスが、「都市学：応用社会学」と題する発表を行っている。かれは都市学には科学とアートとの緊密な組み合わせが必要であるとともに、都市学を具体的な応用社会学として考えるべきだと主張した。C. ブースの司会の下に進められた報告は、すでに最初の田園都市としてレッチワースの建設に着工していた E. ハワードをはじめ出席者から高い評価を得た。新聞などもこの大会を大きく報道した。

さらに、シカゴからは W.I. トーマス (William I. Thomas) がゲデスの報告にコメントを寄せている。ロンドンでの社会学会 (Sociological Society) は今で言うところ、連続講義のような形で開かれた。ゲデスは 1905 年以降も、その続きをなす報告を行っている。

ゲデスは都市学を Civics とよび、この都市の科学はやがて多くの学問のうちで、もっとも実りの多いものとなるだろうと予言した。かれは都市学と社会学の結合を考えていた。都市の科学的研究はかれにとって、社会学の復活をかけたものともなっていた。都市学者の指導のもと社会学会は市民団体の結成や市民運動を奨励するなど都市計画に積極的にかかわろうとする。そして 1907 年には、ロンドン市庁舎での都市計画会議に代表者を送っている。

優生学者は 1907 年に独自の協会を結成したために、かれらの社会学会への影響力は弱くなった。その分、ゲデス学派の勢力が強くなった。社会学会は毎月会議が開かれ、クォーターリーにリビューがあった（後にそれは毎月になる）。そして、ロンドンのアカデミックなサークルや文学サークルの関心を集めている (Boardman, 1978: 199)。

イギリスで最初の住宅・都市計画法が、1909 年にドイツに遅れること約 10 年で制定される。ゲデスはその推進者の一人であった。かれは 1910 年には最初の都市と都市計画についての博覧会を開催している。都市博覧会は社会の進歩を象徴するとともに都市計画に展望を与えるものだった。ゲデスは社会学会で定期的に講演し調査の必要性を説いた。こうしたなかで、ゲデスは『都市の進化』を著す。ここでかれは “Civic Sociology” の名称のもとに、都市社会学を成立させるのである。 (Geddes, 1915=1972: 325)。かれは都市計画、社会事業、田園都市運動などに積極的にかかわる。ゲデスは アンウィン (Raymond Unwin)、メアーズ (Frank Mears)、アーバークロンビーなどの計画家や建築家に影響を与えた。ゲデスは都市社会学の発展のためには、十分な社会調査が必要なこと

を繰り返し強調していた (Abrams, 1968: 116). かれは社会学の発展のためには、既存の科学の枠を破壊しなければならないと考えていた。ゲデスは都市社会学がアメリカで発展すると予想していた。アメリカでは都市の急激な成長のなかで、抽象的で不毛な政治学から具体的な都市学への移行が明白なかたちで見られるという。その間、労働者の生活への関心は深まっていた。ヨーク市の資本家ロウントリー (B. Seebohm Rowntree) は〈貧困線〉を設定し労働者の生活をとらえようとする。ビクトリア時代には社会調査が実施された。A. L. ボーリーの調査もそうしたなかで産み出される (Bowley, 1915: 1925=2001).

ゲデスは 1914 年以降インドの都市計画にかかわるようになる。そして 1919 年にインドのボンベイ大学で社会学と市政学の教授となる。それを期に、エディンバラ時代以来続けてきたダンディー大学の教授を辞している。かれはボンベイ大学で都市研究を行うと同時にインドの都市計画に尽力した (Tyrwhitt, 1947). かれは 1924 年の帰国後もイスラエルのテルアビブ、イエルサレム、ハイファなどの都市計画に関係する。そして 1932 年に、南フランスのモンペリエで亡くなっている。かれが提唱した都市科学 (Civic Science) は、何よりも社会の改良と向上を目指すものである。かれは世界中を駆けずり回った。ゲデスは年平均 10,000 マイルを移動する人間であった。次にゲデスが市政学や都市社会学の発展する兆候が見られるといったアメリカを見てみよう。

3. シカゴ都市社会学と P. ゲデス

アメリカの都市社会学の発展を担ったのが、シカゴ大学である。シカゴ大学は 1890 年に、ロックフェラー財団が新しい大学を作るために莫大な寄付を行ったことから始まった。学長のハーパー (W. R. Harper) はシカゴに世界最初の社会学部を設けることとし、スモール (Albion W. Small) を招聘する。シカゴ大学の社会学部は恵まれた研究条件のなかで、

研究を続けていた。当時の社会学の研究は雑多な社会問題の寄せ集めであり、それを担当したのも、歴史学者だったり哲学者であったりした。スモールは社会学に社会改良の可能性を見ていた。スモールによる1896年の『アメリカ社会学会雑誌』(AJS)の刊行は大きな画期となった。アメリカ社会学が自覚的な学問として登場したのは、1890年代である(Coser, 1978=1981)。J. アダムス (Jane Adams), C. ズェ布林, C. ヘンダーソン (Charles Henderson) などはゲデスなどイギリスの研究の影響を受けていた。これに対して、他の社会学者はドイツの思想や学問を強調していた (Deegan, 1988: 266)。

シカゴにおいてジェーン・アダムスの設立したハル・ハウス (Hull House) が、セツルメント活動の中心地となっていた。ハル・ハウスでは、社会改良のためさまざまな調査を行っていた。ハル・ハウスの調査にはC. ブースのロンドンの貧困調査などが検討されていた。シカゴ大学で都市研究を担ったのは、ハル・ハウスの一員であったズェ布林である。かれはゲデスのエディンバラのサマー・ミーティングに参加しゲデスの都市社会学に大きな影響を受けていた。ヘンダーソンやズェ布林たちはボランティア研究を進めるなど強く社会改良を志向していた。シカゴ大学はハル・ハウスと密接な関係のもとに社会問題に取り組んでいったのである。シカゴは都市問題を通じて、次第に社会学の研究の中心となっていたのである。社会学は、当時の学問の中心だった東部ではなく中西部のシカゴで発展することになる。

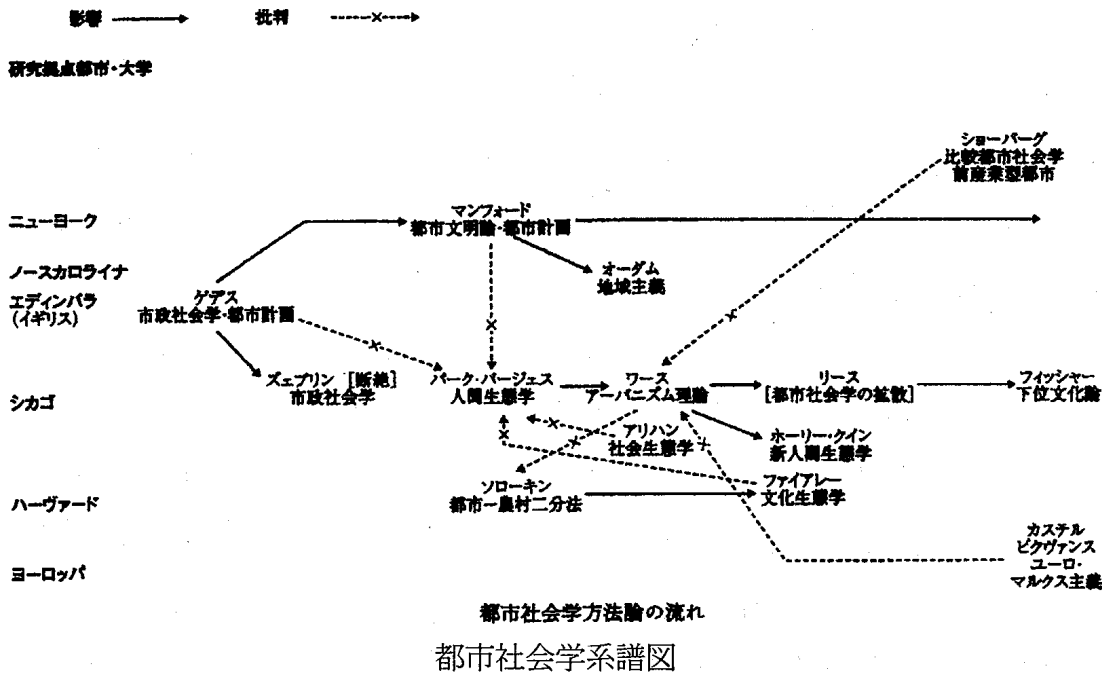
ゲデスは1900年に、ニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴなどを旅している。とくにシカゴの訪問はこの旅行の主眼であった。そこで、かれはジェーン・アダムズ (Jane Adams) と会っている。かれはハル・ハウスにしばらく住み込んだ。妻のアンナ (Anna) もしばらくのあいだハル・ハウスに滞在した。そして恵まれない若者のための仕事を現場で観察した。それは、J. アダムズとの長い友情のはじまりとなった。ゲデスは彼女

をシカゴの女大修道院長 (The Abbess of Chicago) と呼んだ。ゲデスは、ジョン・デューイと会いかれの実験的な学校を訪問している。かれはまた、エディンバラのサマー・ミーティングの常連となっていたズェブリンと再会している。ズェブリンは前年に出版された T. ヴェヴレンの『有閑階級の理論』にいたく興味を魅かれていた (Kitchen, 1975: 186)。

アメリカにおいて社会改革と社会学は祖先を同じくしていた。その後、ズェブリンなど社会改良を志向した学者の何人かは政治的発言から大学を離れざるをえなくなった (鎌田, 1997: 77)。その一方で、純粋に社会学的問題に関心をもつ研究者たちが増えていた (Coser, 1978=1981: 28)。第一次世界大戦頃になると、主としてシカゴ大学社会学部の指導のもとに、社会学者は徐々に確固とした地位を確立していった。産業化にともなう社会の変化は、従来にない対応を必要としていた。社会学の研究も少しずつ変化していった。シカゴの社会学を牽引したのは、トーマスとパークである。とくにトーマスの研究は社会学の研究に決定的な影響を与えることになる。

W. I. トーマスの社会学は、人間の本能の発露や進化法則の一環としてではなく、具体的な問題に経験的資料を「科学」にもとづいて分析することで進めようとするものであった。彼の社会問題へのアプローチと研究態度は社会学の研究に新しい地平を拓くものであった。アメリカ社会学の研究もその基礎を現実のアメリカに置くようになっていたのである。そこに新聞記者などさまざまな経験をもつ R. E. パークが加わっていった。W. I. トーマスや R. E. パークは科学を強く意識した社会学を志向していった。こうしたなかで、社会改良にかかわる市政学 (Civics) や慈善行為 (Philanthropy) などの分野が、次第に社会学とは区別されていった (Bulmer, 1984: 39)。社会学から社会福祉の分野が分離されていったのである。

その後のシカゴの都市社会学を指導したのは、パークである。かれの研究はトーマスの研究のように漸新であったわけではない。パークはトーマ



スの指導のもとにバーゼスらの協力を得ながら、当時の第一線の研究文献を整理した画期的なテキストを編集する。このテキストは『社会学という科学への入門』と題され表紙の色からグリーン・バイブルとまでいわれ、科学的社会学の必読文献として広範に使用された。このテキストはさまざまな研究書をダイジェスト的に編集したものである (Park & Burgess, 1921)。

R. E. パークが1916年に発表した「都市—人間環境研究のための指針」は、それまでの社会改良的な都市研究とは違い科学的な都市研究として、その後の研究の指針になるものとして高く評価されるようになる。かれは科学的な社会研究の方法として、人間生態学 (Human Ecology) を方法論とする都市研究を提唱する。人間生態学は生物学とのアナロジーで、社会をとらえようとするものだった。パークはドイツの進化学者 E. ヘッケルの提唱した生態学 (Ökologie) を社会学に導入する。E. ヘッケルはゲデスのエディンバラの社会学的実験室でのサマー・ミーティングにも参加していた。パークはヘッケルから学んだ生態学にジンメル (Georg Simmel) の

「相互作用論」を組み込むのである⁽²⁾。

R. E. パークに指導されたシカゴ大学の社会学者たちは、科学的方法にもとづいて積極的にシカゴの実態調査に邁進する。パークは明確に科学としての都市研究を意識していた。シカゴの研究者にとって、急速に発展するシカゴを「社会の実験室」に見立てたのである。かれらはグリーン・バイブルを念頭にフィールドに出かけていったのである。そのなかから、N. アンダーソンの『ホボ』、E. R. モウラーの『家族解体』、F. スラッシャーの『ギャング』、H. ゴーボアの『ゴールドコーストとスラム』、L. ワースの『ゲッター』などさまざまな研究が生み出された。シカゴ大学の経験的調査を主軸とする研究は都市研究のみならず、社会学研究として一般化していった。経験的調査は自然科学の実験に当たるものとなっていった。こうして科学としての社会学が可能になるとされたのである。

パーク大学は都市社会学の研究に大きな役割を果たしたハル・ハウスとも断絶しようとした (Deegan, 1988: 62)。ゲデスのエディンバラの展望塔につけられた「社会学的実験室」の名も、パークの「実験室としての都市」の論文名にとって代わられてしまった⁽³⁾。ゲデスの名はかき消されてしまった。都市社会学はイギリスで、P. ゲデスによって“Civic Sociology”として登場した。その都市社会学は L. マンフォードによって発展する。また、シカゴにおいても C. ズェブリンに継承されていた。しかし R. E. パークたちは都市問題から「社会福祉」や「都市計画」の側面を分離することで、新しい都市研究を求めた。ここに、人間生態学を理論的支柱とする科学的な都市社会学 “Urban Sociology” が生み出されたのである。そして都市社会学はシカゴにおけるゼブリンたちのパーク以前の都市研究とも、マンフォードの研究とも無関係だとしたのである。ゲデスの影響を受けたアメリカでの二つのルートであるシカゴの C. ズェブリンとニューヨークの L. マンフォードはともに社会学から追い出されてしまった。

パークは新聞記者をしていたこともあって、平易で明確な文章を書くこ

とに勤めたのであろう。かれの論文は明快である。それだけに彼は他の研究者に明快さを要求した。彼は、A. スモールの論文について、文章が難しくて読むことができないとまでいっている (Raushenbush, 1979: 78; 鎌田・中野, 2003: 35)。たしかにスモールの文章はけっして読みやすいとはいえない (Small, 1895=2003)。シカゴの社会学者たちは、科学的な研究をめざした。平易な文章による表現はそのために不可欠な条件であった。当時のシカゴの学生や大学院生がゲデスの文章に接したとしても、その文章をどこまで読めたかどうか。また、その複雑な文章の読解にどこまで意義を感じられただろうか。

イギリスでゲデスの手によって“Civic Sociology”として登場した都市社会学は、シカゴでズェブリンの社会改良的な都市社会学を経て、新たにパークやバージェスらの指導によって、人間生態学 (Human Ecology) を経由することで、科学的な都市研究、つまり“Urban Sociology”となるのである。L. ワースは1938年、アーバニズム理論を発表する。アーバニズムは都市（人口量・人口密度・人口の異質性）で生み出されながらも都市を越えていく「生活様式 (Way of Life)」である。この論文は、その後の都市研究に大きな影響を与えることになる。アーバニズム理論はシカゴ学派を象徴する理論となった⁽⁴⁾。

4. シカゴ神話の形成と都市社会学の黄昏

ゲデスのさまざまな学問を都市の科学のもとに Civics, Civic Science, Civic Sociology として、動員する研究方法はシカゴのズェブリンではなく、L. マンフォード (Lewis Mumford) に受け継がれていった。かれは、ズェブリン、パーク、バージェス、ワース、W. オグバーン (William Ogburn) などの著作に対して、歴史的、文化的な知識に欠けるとして、鋭く批判した (Mumford, 1923=1974)。

1923年、L. マンフォードはアメリカ地域計画協会 (Regional Plann-

ing Association of America) を創立するとともに、ニューヨークにゲデスを招いている。二人は 1915 年以来、密接に手紙を交わしていたが、実際に会ったのは初めてであった (Novak, 1995)。ゲデスにとっては 23 年ぶりのアメリカ訪問となった。かれはニューヨークの社会調査のためのニュー・スクール (New School for Social Research) で、7 月から 8 月にかけて講義をしている。アメリカ地域計画協会は、現実の都市問題のみならず、田園都市などさまざまな課題を論じる舞台となっていた。

しかしゲデスはその時、前回とは異なり都市研究の中心として名をとどろかせていたシカゴには寄らずに帰国している。1925 年には、L. マンフォードが帰国中のゲデスをエディンバラに訪ねている。マンフォードは都市、技術、芸術などについて、社会の本質に迫る洞察力に富んだ鋭い議論を展開し、各方面に深い感銘を与えていた。ゲデスやマンフォードは、パークの都市論が都市をあまりに病理的側面から見すぎていると批判的な態度をとっていた (Meller, 1990: 303)。しかしゲデスやマンフォードの研究がシカゴの都市社会学者に省みられることはなかった。かれがいかに高名を獲得しても、それは都市社会学とは無関係な議論とされた。こうして、都市社会学はパーク、バージェスからはじまったとするシカゴ学派の神話が形成されていった。

社会学における都市研究にシカゴの神話が形成された。都市社会学はシカゴの独壇場となった。R. E. パーク、E. W. バージェス、L. ワースは都市研究の指導者であった。P. ゲデスや L. マンフォードは都市社会学のなかに出てこない。それどころか、パーク、バージェス以前のシカゴで都市研究者として活躍したズェブリンまでもが等閑に付されてしまった。それに代わって、シカゴ大学社会学部の創立期の専任教員であった学部長の A. スモール、C. ヘンダーソン、ヴィンセント (George E. Vincent)、W. I. トーマスの 4 人が、かれらの活躍の舞台を準備したとして〈ビック・フォー〉 (Big Four) と祀り上げられたのである。

第一次大戦後のアメリカのプレゼンスの増大は、ヨーロッパ人にアメリカの学問を着目させる機会ともなった。その際、社会学の研究はすぐれてアメリカ的な学問として注目を浴びた。シカゴ大学は社会学の中心であった。W. ゾンバルト (Werner Sombart) や J. ホイジンガ (J. Huizinga) など高名なヨーロッパの学者も、パークらシカゴの都市研究に注目した (Huizinga, 1930=1971)。しかし W. ゾンバルトがパークたちの都市研究について、ただたんに統計的資料を集めているに過ぎないと指摘したように、ヨーロッパの学者は概してシカゴの経験的な社会学にきびしい態度をとっていた (藤田, 1978)。

そのことは、また、アメリカの学問がヨーロッパの焼き直しではなく、独自に形成されるようになっていたことを意味していた。シカゴの社会学者たちは自信に満ちていた。その一方で、シカゴの社会学者は、アメリカの他の大学の学者に対して非寛容ともなっていた。ソロキン (Pitirim A. Sorokin) はロシアからの亡命学者として、豊かなヨーロッパの学問の知識を背景にミネソタ大学で研究を進めていた。ソロキンが事実上初めてアメリカで問うたのが、『社会移動論』である。その最初の書評がシカゴ学派の影響の強かった『アメリカ社会学雑誌』に表れた。しかし評者の A. W. リンド (Andrew W. Lind) はわずか15行で、この本には何もないと、片付けた。C. H. クーリー (Charles, H. Cooley) はさすがにこの書評があまりにひどいと、編集長だった E. W. バージェスに抗議する。編集委員会はこの有力な会員の抗議で『アメリカ社会学雑誌』に改めて、前のものとは違った好意的な書評を掲載するありさまだった (Sorokin, 1963: 226-229, 藤田, 2004b)。

ハーヴァード大学は1930年に、新興のシカゴ大学の社会学部の成功に刺激されて、P. A. ソロキンを迎え新しく社会学部を創設した。ソロキンへの敵意はその後も続いた。ソロキンは、ジンマーマン (Carl C. Zimmerman) とともに、都市と農村を対比させて分析する「都鄙二分法」(Urban-

Rural Dichotomy) を提唱した (Sorokin, 1929=1940). これに対して, ワースは都市と民俗社会を連続的に分析する「都鄙連続法」(Urban-Rural Continuum) を提唱する. とくにシカゴ系の学者にとって, アーバニズム理論の「都鄙連続法」はソロキンの「都鄙二分法」を発展させた理論として高く評価され, シカゴ学派の優位を象徴する理論とされるのである. ワースが自己の体系的なアーバニズム理論に近い都市理論としたのが, R. E. パークの都市と, M. ウェーバーの都市論である. しかし R. E. パークの都市はともかく, M. ウェーバーの都市論とは無関係であり, 都市論としてはきわめて性格を異にしており対極的なものである. M. ウェーバーへの言及は, かれの名声へのあやかりですらある. しかしアーバニズム理論はその理論的未整備にもかかわらず, さまざまな調査研究の指針となった.

シカゴの学者の自信は傲慢さと紙一重だった. ジャノヴィッツ (Morris Janowitz) は R. E. L. フェアリス (R. E. L. Faris) の『シカゴ・ソシオロジー』に寄せた論文のなかで, シカゴの社会学者の偏狭さをハーヴァード大学の学者に対する態度に見出している. ハーヴァード大学の T. パーソンズ (Talcott Parsons) は 1937 年に, 『社会行為の構造』を発表する. 本書の刊行はアメリカの社会学に新しい研究のスタイルを確立しようとしていた. この書は同年に刊行された同じハーヴァードのソロキンの『文化と社会のダイナミックス』と異なり, シカゴ社会学の学問的伝統と親縁性をもつものであった. T. パーソンズは E. デュルケム, M. ウェーバー, V. パレートなどの理論を検討し依拠するとともに, 功利主義に強い関心を抱いていた. しかし L. ワースをはじめシカゴの指導的立場にあった研究者は, T. パーソンズの研究に敵意を示したのである. かれらはパーソンズの研究の斬新さを認めず, 経験性の欠如を徹底的に批判した. シカゴにはパーソンズの研究を愚弄する雰囲気広がっていた. ジャノヴィッツはシカゴ大学社会学部のその後の衰退のひとつの要因を, 学部内部に育ってい

た硬直した人間性に求めている。そのシカゴの研究者に外部に目を向けるだけの余裕はなくなっていた。(Faris, 1967=1990: 14-15).

1960年代になると、さしもの隆盛を誇ったシカゴ学派の都市研究も黄昏を迎える。都市社会学は人間生態学理論崩壊後、これにかわる社会学理論を生み出せず、都市研究としてのまとまりをもたなくなっていた。都市研究は都市社会学の研究である以上に、家族の研究であり、ネットワークの研究であり、職業の研究であり、階層・階級の研究となっていた。1960年代のアメリカ社会学の急激な発展のなかで、都市社会学は使命を終えていくのである(Reiss, 1957: 10)。都市社会学の研究は拡散してしまった。都市社会学の退潮は誰の目にも明らかとなった。そして、ついにシカゴ学派の都市研究を担った E. W. バージェスや D. J. ボーグまでが、都市社会学の黄昏を指摘するようになる(Bougue, 1964)。

5 都市社会学の発展と埋没する P. ゲデス

アメリカの社会学やその強い影響を受けた日本の都市社会学はともかく、なぜ、イギリスの社会学においてもゲデスの研究は埋没していったのだろうか。その第一は、イギリスにおける社会学の低迷である。イギリスは社会科学の発生の地といってもいいだろう。しかし社会学は社会調査としては残ったが、学問としては低迷した。社会学はオックスフォードやケンブリッジの学問にはならなかったのである。社会学はまず具体的な社会改良、地域計画、都市の再開発など実践面に関心をもち、理論的な面への関心が弱かった(Barns, 1927: 45)。アカデミックな社会学はロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンスなどで、細々と生きていたに過ぎない(Harper, 1943: 341)。その社会学ですら、大陸の社会学からすると、理論的なものではなかった。このことは、その後 K. マンハイム(Karl Mannheim)がイギリスに亡命した際に、M. ギンスバーグ(Morris Ginsberg)の経験的研究を主とする見解に失望

するのも、イギリスの社会学の風土を反映したものであったからである (澤井, 2004: 36-37).

社会学会 (Sociological Society) がロンドンで結成されたとはいえ、エディンバラを活躍の舞台としてきた M.V. ブランフォードと P. ゲデスというスコットランド人の活躍によって創立されたことも、このことと深く関係している。また、ゲデスはロンドンにとどまることなく世界中を駆けずり回っていた。社会学会の機関紙 *Sociological Papers* は 1907 年に 3 号をもって終了し、1908 年からは、社会研究所 (Institute of Sociology) とル・プレー・ハウスの共同で、*Sociological Review* と改名して刊行される。1953 年以降は *Sociological Review* はイングランド中部スタフォードシャーのキール大学 (Keele University) からニュー・シリーズとして刊行されている。社会学会の結成は優生学者との密接な関係でなされた。しかし 1907 年に優生学者が別の学会を結成し多くが社会学会から離れていったことは、社会学会の活力を削ぐことともなった。しかし社会学会が設立当初に優生学 (Eugenics) と密接な関係をもっていたことは、優生学が否定され崩壊した後、社会学に暗い影を落とすこととなった。社会学者は悪魔の科学となった優生学との関係を思い出したくなかった。

イギリスの社会学は 1950 年代に発展しはじめる。イギリスの社会学は 1960 年代になると、大きく拡大する (Halsey, 2004: 112)。これにともなって、アメリカの社会学がイギリスに流入する。イギリスの都市社会学は世帯の家計調査の分析に焦点を合わせていた。社会現象を階級との関係で分析しようするのである。これに対して、シカゴは近隣関係、ギャング、インフォーマルな関係に研究の焦点を当てていった (Savage, et al., 2003: 21)。アメリカの都市社会学への関心は、イギリスの学者にも研究の幅をもたせることとなった。

しかしその際、都市社会学はシカゴのものとされ、P. ゲデスの名前はなかった (Pahl, 1966)。しかし地理学や都市計画のなかで、ゲデスは活き

続けた。R. デッキンソン (Robert Dickinson) や P. ホール (Peter Hall) の研究にもゲデスの研究は生かされている (Dickinson, 1970, Hall, 1988)。しかしゲデスが社会学の分野で取り上げられるようになるのは、ようやく最近のことにすぎない (Thorns, 2002)。

日本におけるゲデスの埋没はどのようになされたのであろうか。日本の都市社会学は揺籃期よりアメリカの社会学を導入する形で研究が進められてきた。日本で最初に都市社会学を紹介したのは、米林富男である。かれは最初に社会学の世界にアメリカの都市社会学を紹介する。米林富男はシカゴの生態学を紹介したのである。このシカゴの都市社会学を都市の社会科学研究に位置づけたのが、奥井復太郎である。奥井は留学先のドイツの学問ばかりでなく、W. モリスやジョン・ラスキンの思想に強い共感をもつなどイギリスの社会思想に強い関心を抱いていた。かれは、E. ハワード、T. アダムス、R. アンウィンなどの都市計画に強い関心を抱いたが、ゲデスやマンフォードへ言及することはなかった。この点は、ゲデスが熱心に取り組んだセツルメント運動に関東大震災後に参加することで都市研究に入っていた磯村英一も同様であった。

戦後のアメリカ社会学の隆盛のなかで、戦前に農村研究で大きな成果をあげた鈴木栄太郎がシカゴ学派とは一線を画しながら、都市研究にはいつてきた。しかし、鈴木が言及したのは P. A. ソロキンや C. C. ジンマーマンなどのハーヴァードの学者であった。日本におけるゲデスやマンフォードへの言及は、かえって戦後シカゴ大学で L. ワースに学んだ矢崎武夫にある。しかし矢崎もゲデスやマンフォードの研究を都市の歴史的個別記述を志向したものにとらえ、その存在を指摘するにとどまった (矢崎, 1963: 30)。都市の社会学説を幅広く検討した倉辻平治においても、ゲデスはマンフォードとの関係で二次的に触れられたただけである (倉辻, 1961)。その後、急増したマルクス主義の都市研究においても、ゲデスに言及することはなかった。マルクス主義者は F. エンゲルスの『イギリス

における労働者階級の状態』に強い興味を抱いても、R. オーエン (Robert Owen) の都市論にも遡らなければ、P. ゲデスの都市論にもたどり着かなかった。それでいて、かれらは批判の対象としてのシカゴ学派に関心を抱き続けている。それは 1980 年以降ヨーロッパの都市研究が新都市社会学として導入されてからも変わっていない。

日本の都市社会学者の多くは、シカゴ学派の都市研究に強い親近感を示している。P. パーク、E. W. バージェス以後のシカゴの学者が都市社会学を開始したことは定説となっている。高橋勇悦の『現代都市の社会学』は、都市の社会学説を本格的に検討した最初の著作である (高橋, 1969)。しかしここで、高橋はゲデスに遡ることはなかった。この点では程度の差はあれ、マルクス主義者も同様だったのである。アメリカの都市社会学を高橋とは異なる視角から取り上げた吉原直樹も、同様の態度をとった (吉原, 1983)。むしろゲデスの名は都市に関する記述を渉猟した山岸健の著作に見えるだけである (山岸, 1974)。

こうした都市社会学観のたどり着いた先が、秋元律郎の『都市社会学の源流—シカゴ・ソシオロジーの復権—』となっていた。都市社会学の成立については、P. パーク、E. W. バージェス以降に認めることが定説となっているにしても、秋元はゲデスを都市社会学の〈源流〉のひとつとしても認めなかったのである (秋元, 1989 年)。この考え方は高橋勇悦の『都市社会学の展開』でも踏襲されている (高橋, 1993)。その後、ゲデスは世界都市 (World City) 概念の先駆的提唱者として触れられたにとどまる (町村, 1994: 3)。秋元の立場はその後の『現代都市とエスニシティ—シカゴ社会学をめぐる—』や『近代日本と社会学』で再度確認されるのである (秋元, 2002, 2004)。日本の都市社会学ではアメリカの都市社会学と同様に、都市社会学をパーク以降のシカゴ学派にはじまるとしている。シカゴの都市研究者であっても、C. ズェブリンはジェーン・アダムスのハル・ハウスとの関係に触れる際に、控えめに言及されるにとどまってい

る。ましてそこに、P.ゲデスの名をみることはない。また、ゲデスの賛同者として時とともに内外に名声を高めていく L. マンフォードに対しては、都市計画家や文明評論家として、都市社会学者の視野の外に置いたのである。

こうしてみると、ゲデスの都市研究は、都市計画学や地理学の分野では再発見であっても、社会学では発見であって、再発見ではない。都市社会学には、奥井復太郎以来、ゲデスの影はなかったといっても過言ではない。そしてこれに異をとる社会学者はいなかった。日本の学者は欧米の研究者の見解を尊重する。そして一度定着した見解を、再度別の観点から見直すことに熱心ではなかった。都市社会学の出発点をなしたのが、1915年の P. パークの「都市：都市的環境における人間行動調査のための指針」とされる (Park, 1915=1972)。このことは、あたかも都市社会学者であることのアイデンティティであるかのように繰り返し強調された。しかしその一方、その同じ年に刊行されたゲデスの大著『進化する都市』の意義を説こうとする社会学者は出なかった (Geddes, 1915=1982)。そしてこのことは、この本に翻訳が出されてからも変わらなかった。まして、ゲデスのロンドン社会学会での報告が話題になることもなかった。

そのことは、また、都市社会学の研究者がそもそも学説史の研究に、大した意義を見出さないこととも関係しているのかもしれない。都市社会学者にとっては、R. K. マートン (Robert K. Merton) が、『社会理論と社会構造』の冒頭で引用した「創立者を忘れかねている科学は、もう駄目である」とのホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) の言葉の方が、よほど身近なものとなっているのである。日本の都市社会学者は他の国にもまして、その性格を強く示している。その一方で、パークやワースたちの都市研究の意義が繰り返し語られているのである⁽⁵⁾。イギリスの社会学はといえば、ゲデスを視野に収める形で都市研究を発展させる機会をもつ学問となることはなかった。

註

- (1) イギリス社会学会の結成が、1904 年であることは、社会学の研究が活発に行われていたアメリカ社会学会の結成が 1905 年であり、ドイツ社会学会の結成が、1909 年であることを考えると、きわめて早いといわなければならない。
- (2) パークの著作にも Urban Sociology ということばがないわけではない (Park, 1953: 98). しかしこのことばはかれにとって、一般的な用語ではなかった。実際に Urban Sociology という言葉を自覚的に使い研究を進めたのは、ずっと後の 1927 年のベッドフォード (S. E. W. Bedford) の研究であるといわれている (磯村, 1977: 151)
- (3) 秋元律郎は「社会的実験室としての都市」ということばについて、これほど声高にうるさく引用されてきたことばも少ないとしたうえで、それはけっしてパークの発想ではなかったし、また都市研究にさいして示されたかれ独自の見解でもなかったことを指摘している (秋元, 2001: 27-28).
- (4) ここで、都市社会学が Sociology of City としてではなく、Urban Sociology として成立したことの意味を考えてみたい。都市社会学は Urban Sociology の翻訳である。urban は形容詞であるので、正確には、都市「的」社会学という意味になる。したがって、語法からすると、都市社会学なら City Sociology か Sociology of City となるであろう。しかし City Sociology か Sociology of City の用語をみることはほとんどない。Urban Sociology の前身をなすゲデスの都市社会学も Civic Sociology であって、City Sociology や Sociology of City ではない。では、なぜ、都市社会学は Urban Sociology として成立し、City Sociology や Sociology of City として成立しなかったのだろうか。

ここで注目すべきは City の語になぜ形容詞がないのかということであろう。City という語は何よりも自治体としての法的資格を表している。したがって、City という資格は付与されているか、いないのかの二つにひとつであって、中間というものは想定しにくい。人口が少ない集落でも、City という資格が与えられれば、City であるし、いかに人口が多い巨大な集落でも、法的資格を与えられなければ、City ではない。イギリスではマンチェスターが大集落に成長してもいつまでも City の資格をもっていなかった。

当時必要とされた社会学研究は、都市の大集落との関連で分析する社会学

研究であって、自治体との関連で分析する社会学ではなかった。City Sociology や Sociology of City といったのでは、どうしても City という自治体組織の社会学研究という意味合いが強くなる。そこで、人口や集落の規模や密度との関連で〈一般的〉〈法則的〉にとらえる概念として、Urban の語が用いられるようになったのである。その Urban Sociology とは、ゲデスやズェブリンらの Civics や Civic Sociology とは区別された科学的な社会学的研究を意味したのである。こうして成立した Urban Sociology が、日本語では都市「的」社会学ではなく、都市社会学とよばれているのである（藤田，1984）。

- (5) シカゴ学派の研究は近年、急激に進んでいる。シカゴ学派と銘をもつ論文が急増しているばかりか、単行本が相次いで出版されている。これにともなって、従来のステロ化されたシカゴの都市社会学像も大きく転換している。

参 考 文 献

- Abrams, Philip, 1968, *The Origins of British Sociology: 1843-1914*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Abrams, P., et al. (eds.), 1981, *Practice and Progress: British Sociology: 1950-1980*, London, George Allen & Unwin.
- 秋元律郎, 1989,『都市社会学の源流—シカゴ・ソシオロジーの復権—』有斐閣.
- 秋元律郎, 2002,『現代都市とエスニシティ—シカゴ社会学をめぐって—』早稲田大学出版部.
- 秋元律郎, 2004,『近代日本と社会学』学文社.
- Barnes, Harry Elmer, 1927, The Fate of Sociology in England, *Proceedings of the American Sociological Society*, 12: 26-46.
- Boardman, Philip, 1978, *The Worlds of Patrick Geddes: Biologist, Town Planner, Rre-educater, Pease Warrior*, Routledge and Kegan Paul.
- Bulmer, Martin, 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, The University of Chicago Press.
- Bulmer, Martin, 1986, *Essays on the History of British Sociological Research*.
- Bowley, A. L. & Burnet-Hurst, A. R., 1915, *Livelihood and Poverty*, London G. Bell and Sons (友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳, 2001『計量社会学の誕生』文化書房博文社).
- Bryce, James (ed), 1905, *Sociological Papers*, Macmillan & Co., Ltd.

- Burgess, E. W. & Bogue, D. J. (eds.), 1964, *Contribution to Urban Sociology*, University of Chicago Press.
- Cherry, Gordon E. (ed.), 1981, *Pioneers in British Planning*, The Architectural Press (大久保昌一訳, 1983, 『英国都市計画の先駆者たち』学芸出版社).
- Geddes, Patrick, 1915 (1968), *Cities in Evolution*, Ernest Benn Limited (西村一朗他訳, 1982, 『進化する都市』鹿島出版会).
- Coser, Lewis A., 1978, *American Trends*, Tom Bottomore and Robert Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books, 1978 (磯部卓三訳, 1981, 『アメリカ社会学の形成』アカデミア出版会).
- Dickinson, Robert, 1964, *City and Region*, Routledge and Kegan Paul London (木内信蔵・矢崎武夫訳, 1974, 『都市と広域』鹿島出版会).
- Dickinson, Robert, 1970, *Regional Ecology*, John Wiley & Sons, Inc., New York.
- Faris, R.E.L., 1967, *Chicago Sociology: 1920-1932*, University of Chicago Press (奥田道大・広田康生訳, 1990, 『シカゴ・ソシオロジー: 1920-1932』ハーベスト社).
- Eldridge, John, 1980, *Recent British Sociology*, The Macmillan Press Ltd.
- 藤田弘夫, 1978, 「社会思想としてのアメリカ都市社会学—『アメリカ都市研究の』の知識社会学的研究」(藤田弘夫, 1982, 『日本都市の社会学的特質』時潮社).
- 藤田弘夫, 1984, 「都市と国家の関係について—Urban Sociology に関する一考察—」『社会学評論』第 34 巻 第 4 号 (藤田弘夫, 1990, 『都市と国家—都市社会学を越えて—』ミネルヴァ書房).
- 藤田弘夫, 1999, 「奥井復太郎と欧米の社会科学」川合隆男・藤田弘夫編, 前掲書.
- 藤田弘夫, 2000, 『奥井復太郎—都市社会学と生活論の創立者—』東信堂.
- 藤田弘夫, 2003, 『都市と文明の社会学—環境・リスク・公共性—』東京大学出版会.
- 藤田弘夫, 2004a, 「ある社会学者の戦い—P. A. ソロキンの数奇な生涯—」『法学研究』第 77 巻 第 1 号.
- 藤田弘夫, 2004b, 「近代化と社会学像の変貌」『現代社会学理論研究』14 号, 人間の科学社.
- Hall, Peter, 1988, *Cities of Tomorrow*, Basil Blackwell.
- Halsey, A.H., 2004, *A History of Sociology: Science, Literature, and Society*, Oxford University Press.
- 橋本和孝, 1996, 『ソーシャル・プランニング—市民生活の醸成をもとめて—』東信

堂.

Haußermann, Hermut u. Walter Stebel, 2004, *Stadtsoziologie: Eine Einführung*, Campus.

Harper, E. B., 1943, Sociology in England, *Social Forces*, 11.

日笠端, 1997, 『市町村の都市計画: コミュニティの空間計画』 共立出版.

星野辰雄, 1933, 「ゲデス教授一派の都市社会の基本調査に就いて」『都市問題』 第17巻 第4号.

宝月誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究』 恒星社厚生閣.

宝月誠・吉原直樹編, 2004, 『初期シカゴ学派の世界』 恒星社厚生閣.

Huizinga, J., 1930, *Wege zur Kulturgeschichte* (磯見昭太郎訳, 1971, 「アメリカの精神」 ホイジンガ著作集『汚された世界』 河出書房新社).

磯村英一, 1963, 「社会学の都市計画への接近」『社会学評論』 第14巻 第1号.

磯村英一, 1977, 「戦前の都市研究」『社会学評論』 第28巻 第2号.

磯村英一, 1989, 『都市論集』 全3巻, 有斐閣.

鎌田大資, 1997, 「AJS から見たシカゴの社会学者」宝月 誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』 恒星社厚生閣.

鎌田大資・中野正大, 2003, 「初期シカゴ学派社会学の確立—E. W. バージェスの人と作品」『京都工芸繊維大学・人文』 第51号.

鎌田大資・中野正大, 2004, 「初期シカゴ学派社会学の確立—E. W. バージェスの人と作品 (その2)」『京都工芸繊維大学・人文』 第52号.

川合隆男・藤田弘夫編, 1999, 『大都市論と生活論の祖型—奥井復太郎の研究』 慶應義塾大学出版会.

木原武一, 1984, 『ルイス・マンフォード』 鹿島出版会.

Kitchen, Paddy, 1975, *A Most Unsettling Person: An Introduction to the Ideas and Life of Patrick Geddes*, Victor Gollancz Ltd.

倉辻平治, 1961, 『都市の経済社会理論』 ミネルヴァ書房

Lin, Jan & Christopher Mele (ed.), 2004, *The Urban Sociology*, Reader (Routledge Urban Reader Series).

Luccarelli, Mark, 1995, *Lewis Mumford and the Ecological Region: The Politics of Planning*, The Guilford Press, N.Y.

町村敬志, 1994, 『「世界」都市東京の構造転換』 東大出版会.

Mairet, Philip, 1957, *Pioneer of Sociology: the Life and Letters of Patrick Geddes*, Lund Humphries, London.

Meller, Helen (ed.), 1979, *The Ideal City*, Leicester University Press.

Meller, Helen, 1990, *Patrick Geddes: Social Evolutionist and City Planner*,

- Routledge & Kegan Paul, London.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, revised ed., Glencoe, Ill., Free Press (森東吾他訳, 1961, 『社会理論と社会構造』 みすず書房).
- 源昌及, 2003, 『近代日本における地理学の一潮流』 学文社.
- Mumford, Lewis, 1938, *The Culture of Cities*, Harcourt Brace Janovich., N.Y. (生田勉訳, 1974, 『都市の文化』 鹿島出版会).
- Mumford, Lewis, 1961, *The City in History*, Harcourt Brace & World, Inc., N.Y. (生田勉訳, 1969, 『歴史の都市・明日の都市』 新潮社).
- 中野正大・宝月誠編, 2003, 『シカゴ学派の社会学』 恒星社厚生閣.
- 西山八重子, 2002, 『田園都市の社会学』 ミネルヴァ書房
- Novak, Jr. Frank G. (edited and introduced), 1995, *Lewis Mumford and Patrick Geddes*, Routledge, London.
- 野沢秀樹, 1983, 「エリゼ・ルクリュの地理学体系とその思想」『地理学評論』第59巻 第11号.
- 小田内通敏, 1932, 『郷土教育運動』 刀江書院
- 奥井復太郎, 1930, 「都市問題, 一考察」日本都市学会編『奥井復太郎著・都市の精神』 NH 出版 1970 年.
- 奥井復太郎, 1932, 「都市社会学の視野」同上書.
- 奥井復太郎, 1940, 『現代大都市論』 有斐閣 (1985 復刻版・1998 著作集).
- 奥井復太郎, 1943, 「集団住宅論」『著作集』第6巻 大空社 (1999 著作集).
- 奥井復太郎, 1948, 「都市計画」『著作集』第7巻 大空社 (1999 著作集).
- 大澤善信, 1993, 「チャールズ・ブースのロンドン」吉原直樹編『都市の思想』 青木書店.
- 大澤善信, 1993, 「ハル・ハウスと社会学者ジェーン・アダムス」吉原直樹編同上書.
- Pahl, R. E. (ed.), 1966, *Readings in Urban Sociology*, Pergamon Press, Oxford.
- Park, Robert E., 1915, *The City* (大道安次郎・倉田和四生編訳, 1972, 『都市』 鹿島出版会).
- Park, Robert E., 1921, *Introduction to the Science of Sociology*, University of Chicago Press.
- Park, Robert E., 1929, *The City as Social Laboratory* (町村敬志・好井裕明編訳, 1986, 『実験室としての都市』 御茶の水書房).
- Raushenbush, Winifred, 1979, *Robert E. Park: A Biography of a Sociologist*, Duke University Press, Durham, N.C.

- Reiss, Albert J., 1957, *The Sociology of Urban Life: 1045-1956*, P. K. Hatt & A. J. Reiss (eds.), *Cities and Societies*, The Free Press.
- Romano, Mary Ann (ed.), 2002, *Lost Sociologists Rediscovered*, The Edwin Mellen Press.
- Small, A. W., 1895, The Era of Sociology, *The American Journal of Sociology*, Vol. 1, Number 1 (福田光弘訳, 2003, 「社会学の時代」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第55号).
- Small, A. W., 1895, The Civic Federation of Chicago: A Study in Social Dynamics, *The American Journal of Sociology*, Vol. 1, Number 1 (三上真理子訳, 2003, 「シカゴ市民連盟」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第56号).
- Savage, Mike, Alan Warde, & Kevin Ward, 2003, *Urban Sociology, Capitalism, and Modernity, 2nd*, Palgrave Macmillan Press Ltd.
- 斉藤昇一, 1936, 「都市社会学邦文文献目録」日本社会学会『社会学』4号.
- 澤井敦, 2004, 『カール・マンハイム—時代を診断する亡命者—』東信堂.
- Sorokin, Pitrim A., 1963, *A Long Journey*, College and University Service, New Haven, Connecticut.
- 新明正道, 1959, 「わが国都市社会学の動向」『新明正道著作集』第10巻, 誠心書房.
- 高橋勇悦, 1969, 『現代都市の社会学』誠信書房.
- 高橋勇悦, 1993, 『都市社会論の展開』学文社.
- Thorns, David C., 2002, *The Transformation of Cities: Urban Theory and Urban Life*, Palgrave Macmillan.
- Tullos, Allen, 1990, The Politics of Regional Development: Lewis Mumford and Howard Odum, in Thomas, P. & Agatha C. Hughes, *Lewis Mumford: The Public Intellectual*, N.Y., Oxford University Press.
- Tyrwhitt, Jacqueline (ed.), 1947, *Patrick Geddes in India*, London, Lund Humphries.
- 山岸健, 1974, 『都市構造論』慶応通信.
- 矢崎武夫, 1962, 『日本都市の発展過程』弘文堂.
- 矢崎武夫, 1963, 『日本都市の社会理論』学陽書房.
- 米林富男, 1932, 「アメリカ都市社会学」田辺寿利・古野清人編『社会学』第一号, 森山書店.
- 米林富男, 1940, 「都市社会学の方法論的考察」『都市問題』第30巻 第6号.
- 吉原直樹, 1983, 『都市社会学の基本問題』青木書店.

都市社会学の展開と P. ゲデス

吉原直樹編, 1993, 『都市の思想－空間論の再構成に向けて』 青木書店.

Zueblin, Charles, 1899, The World's First Sociological Laboratory, *The American Journal of Sociology*, Vol. IV, Number 5 (高岡文章訳, 2003, 「世界で最初の社会学的実験室」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第 55 号).